

大阪府保育士会だより

平成24年1月1日

第89号

# ほほえみ

大阪府社会福祉協議会  
保育部会・保育士会  
大阪市中央区中寺1-1-54  
TEL 06-6762-9001



「上手やね」の声が励みに



子どもたちは年に数回、老人会や老人施設の行事に招かれ、おじいちゃん、おばあちゃんとのふれあいを楽しんでいます。一方で園の運動会や発表会には招待し、子どもたちと一緒に参加してもらい、元気いっぱい舞姿を披露、大きな拍手や声援に大喜びです。

「上手やね」「また来年も楽しみにしてるね」といったあたたかい言葉が子どもたちの自信や励みとなっています。地域の人たちの愛情に囲まれ、すくすくと成長してゆく姿がうかがえます。(堺市 北野田保育園)

## 地域と共 ふれあひ大切



大賑わいの「まぶねっこまつり」



4・5歳児クラスが楽しんでいたお店屋さんごっこを発展させた「まぶねっこまつり」を開催して3年目になります。在宅での子育て家庭や卒園児、幼稚園児の保護者の方にもたくさん参加してもらい、園庭は大賑わいになります。

はじめは仲間入りするのを恥ずかしがっていた子どもたちも、やがて大きな声を出すようになり、みんな一緒に楽しめます。いまでは地域との交流に欠かせない行事になっています。(八尾市 久宝まぶね保育園)



親子教室は毎月20組の地域の親子が参加する「親と子のふれあい」に重点を置いて、園が小さな「ささえ」に組み取り、親子で遊ぶ季節に、マに、



あびによん保育園は、フランス民謡♪あびによんの橋から楽しく、リズムカルな響きをイメージして名づけました。

保育園での時間を「地域の子どもたちや子育て家庭と一緒に楽しめたら」と、そんな思いから地域の子育て支援をはじめました。当園の子育て支援は、「子育て支援センター」としてではなく、園単一の取り組みです。親子で取り組む育児教室や保育園開放(園庭開放)などが主なものです。とりわけ地域のみなさんに評価してもらっているのが親子教室です。

親子教室は毎月20組の地域の親子が参加する「親と子のふれあい」に重点を置いて、園が小さな「ささえ」に組み取り、親子で遊ぶ季節に、マに、

た遊びや親と子がモノ作りで遊んだり、音楽的な「音を楽しむ」を遊びに展開したプログラムを考えられています。

プログラムに参加されたみなさんからは、「ナマでピアノを聴き、音に合わせて遊ぶ楽しさがわかった」などの声が聞かれます。いろいろな遊びがある中で、保育園での遊び、みんなが参加する遊びが地域の保護者の方々にも新鮮に受け入れられているようです。

子育てがもっと楽しくなるような環境を整え、お母さんたちが多くの出会いや「遊び」を経験し子育ての意見を交換し合ってほしい。それが当園の理念でもある「共に育つ」楽しみや希望につながり、そして、園が小さな「ささえ」になることができればと思っています。(吹田市 あびによん保育園)

子育て支援シリーズ③

親子で遊ぼう!

「音を楽しむ」プログラム

地域から高い評価の「親子教室」





# 感銘を与えた大阪の「スマイルサポーター」

## 分科会で小宮氏が発表

— 全国保育研究大会に1900名参加 次回は沖縄で



丸全国 保育協

第55回全国保育研究大会が11月2日から3日間にわたり横浜市のパシフィコ横浜で開催されました。「すべての人が子どもと子育てに関わりをもつ社会の実現を目指して」をメインテーマに、約1900名が参加。最終日には次期開催地の沖縄県のアピールで締めくくりました。

オープニングは横浜市消防音楽隊の演奏とともに、ポトエンジンエルス119によるフラッグを持つでのステージドリルで華やかに開幕。そのあと物故者とともに、東日本大震災で亡くなられた人々への黙祷が捧げられました。

2日目は11分科会に分かれ研究発表のほか、意見交換やグループ討議が熱心に行われました。「子育て、子育て支援のネットワークと保育所の役割」がテーマの第6分科会では、大阪から泉佐野ルーテル保育園の小宮恵一園長(写真)が発表。小宮氏は「スマイルサポーター」の説明を交えながら、保育園が地域とつながることの必要性や大切さを訴えられ、

3日目は川崎医療福祉大学の佐々木正美特任教授が「コミュニケーションへの

希望、子どもに自信と意欲を」と題し記念講演。保育園は家庭の延長ではない。子どもも社会である3歳までに習得したものが蓄積され、無条件に愛することで愛着形成がなされると述べられ、乳幼児期の関わり大切さを指摘しました。(柏原市 国分保育園)

「9月7日」山梨大学の加藤繁美教授が「生成する物語と保育実践との豊かな出会い」対話と共感の保育実践」をテーマに講義しました。加藤教授は初めに、感情や想像など子どもから生まれてくるものすべてを「生成」と位置付け、その生成を育てるには子どもがどのように考え、どのように対応していくかを経験する保育が大切で、それは「対話」の中で生まれると指摘しました。そのうえで「イモ掘り」を事例にあげ、子どもたちが掘りやすいように、つるを前もって取り除いてしまいがちですが、それではただイモを掘り出すだけの経験で終わってしまう。しかし、たくさんのつるに埋れていると、

子どもたちはいろいろな疑問や発想を体験できます。そこで生まれた発想や疑問に対し、保育士がどれだけ耳を傾け、受け入れ、付き合う、つまり共感しながら対話できるかで生成力が違ってくるかと強調されました。また、2歳の時期や反抗期に出てくる自我をしっかりと受け止め、対話していくことで心が発達し、次の成長期がきても乗り越えられるそうです。子どもが発信するすべてをしつかり受け止める対話することを忘れてはならないと強く感じました。(岸和田市 八木保育園)

参加者に感銘を与えました。助言者の玉川大学准教授の大豆生田啓友氏は、保育の「日常」そのものが子育て「支援」であり、保育の質は支援の質ともいえることを強調しました。

希望、子どもに自信と意欲を」と題し記念講演。保育園は家庭の延長ではない。子どもも社会である3歳までに習得したものが蓄積され、無条件に愛することで愛着形成がなされると述べられ、乳幼児期の関わり大切さを指摘しました。(柏原市 国分保育園)

### 子どもの疑問や発想を促す対話力を

#### 「イモ掘り」事例に加藤教授

「イモ掘り」を事例にあげ、子どもたちが掘りやすいように、つるを前もって取り除いてしまいがちですが、それではただイモを掘り出すだけの経験で終わってしまう。しかし、たくさんのつるに埋れていると、

「11月15日」財団法人大阪国際児童文学館特別専門員の川内五十子氏が「子どもたちと楽しむ絵本の時間」絵本の選び方と読み聞かせ」をテーマに講義しました。川内氏は絵本構成の基本について①表現②文章③ページをめくりの3点をあげ、ページをめくり話をすすめる時、子どもは想像力を働かせて次の展開を予測し、自分の体験とも重ねながら絵本を楽しむものだ、しかし、大人はそのことに気付かず省略しがち。時には大人も人に絵本を読んでもらえば、読み聞かせる場合とは違う世界が見えてくると指摘しました。

また、読み手が読むことを楽しめない内容や面白さが伝わらない。事前にしっかりと読み込み、楽しんで読むことが大切と強調。絵本の持ち方についても、右開き(横書き)は右手で、左開き(縦書き)は左手で持つとページを横切らずに読み聞かせることができることアドバイスしました。なお、脇田保育園(門真市)の森永知子先生が「一貫した日課の中で安心して生活環境と刺激的な経験ができる環境を考える」好奇心と主体性を尊重する保育とは」と題して研究発表。森永先生は全国保育士会研究大会(3面に記事)でも実践発表しました。(八尾市 千塚保育園)



23年度保育士研修会が9月と11月、大阪府社会福祉会館などで開かれました。主な内容は以下の通りです。



読み手が絵本を楽しまなければ... 川内氏がノウハウを伝授



# 子どもが豊かに育つ保育の実践

— 鹿児島で第45回全国保育士会研究大会開く —

「遊びこむ」ことが成長につながる

— 協田保育園が発表 —



子どもが豊かに育つ保育の実現をテーマに、第45回全国保育士会研究大会が平成23年10月20、21の両日、鹿児島県で開催されました。初日の開会式では、倫理綱領の唱和、永年勤続保育士への感謝状贈呈があり、続いて厚生労働省雇用均等・児童家庭局保育課長の橋本泰宏氏から「子ども・子育て新システム」について行政報告が行われました。

引き続き全国保育士会会長の上村初美氏が基調報告、今後の東日本大震災の被災地支援や保育所保育指針の実践による保育の質の向上などについて報告しました。

記念講演では、歌手でピアニストの北田康広氏が「心の瞳コンサート」と題して素晴らしい歌声とピアノ演奏を披露され、感動と勇気を与えられるひとときとなりました。

2日目は分科会が開かれ、大阪府からは門真市の協田保育園の発表が行われました。

主な発表内容は、個々の子どもの発達に応じたおもちゃを作り、遊びの計画を立て、子どもがしっかりと「遊びこむ」ことによって成長につながったこと、乳

児の保育環境の見直し、人的環境・空間整備によって子どもの喃み付きやヒヤリ・ハットの多発を防ぐことができたことなど事例をわかりやすく報告されました。また、見直しをする中で保育者自身の成長にもつながったという興味深い指摘もありました。

助言者のお茶の水女子大学大学院准教授の青木紀久代氏は「実践研究は自分たちの実践の価値や課題の発見を通して、保育者の成長につながる」と述べました。

「保育って何をしているの?」「幼児教育って?」「遊びの意味は?」といわれることがあります。残念ながら、まだまだ保育というものが一般社会からはわかりにくい存在なのだと感じる瞬間です。私も含めて、保育の世界は、保育園・幼稚園ともに一般社会にわかるような説明をしてこなかったのかと大きな反省をしています。

「子どもの発達に即した保育」について考えてみましょう。就学前の子どもは全て未成熟な段階であり、人間が人間らしくなっていくには、教育が必要です。近年求められる「生きる力」とは、豊かな人間性・

健康な心身(体力・気力)・確かな学力の基礎が総合的に育つことです。その発達に必要な経験や学習は、遊びから生まれます。遊びや環境は、乳幼児が発達するために様々な経験をさせるチャンスと考えるください。まさに、生活の中で、子どもは発達します。

では、皆さんは「手遊び」で何が育つと考えているでしょうか。「手の操作性」をするにはまず、「人と関わる力」「相手の姿をしっかりと見る力」「言葉を聞く力」「聞いて理解する力」「聞いて覚える記憶力」「聞いて覚える身体で表現する力」

「リズムを感じる力」「拍に合わせてリズムを取る力」「人の真似、模倣する力」「楽しいなどと感じる心情」「楽しいという気持ちへの気づき」「歌詞から学ぶ言葉力」など様々な要素が含まれています。

では、「鼻」を皆さんは、いつ認知したでしょうか。「花」と「鼻」の違いは、漢字という文字であればわかりやすいです。しかしながら、乳幼児期は、まだ言葉の単語力は少なく、むしろ生活の中で獲得し、生活全ての事象、ありとあらゆる事を言語化しながら認知していく時期です。特に大切な発達は、五感(聴覚・視覚・味覚・触覚・嗅覚)で感じたことを言葉という共通の言語記号に置き換える力です。言葉を通して人は思考し判断していきます。「空」はどうでしょうか。「あお」という色、「そら」という自然、空は上にあるという空間認知、上をむくという身体動作などです。確かな学力の基礎は、勉

強の先取りではなく、「子どもの遊びの意味は何か」「その経験(活動や遊び)を通して子どもに育ったものは何か」を観察するとき、ダイヤモンドの原石を見つけることができるでしょう。保育者は、そのダイヤモンドにカットングをする人であり、子どもが求めているものは何かという主体性の尊重と、それを言語化して認知しやすいようにする意図性が求められています。

保育者は、生活の中で、ダイヤモンドの原石である遊びの姿に1日ひとつでも発達の視点(ねらい)をもつ観察ができることが大切です。子どもが「深く穴を掘った」時には「深く掘れたね」ということへの気づきがあり、そのことへの認知と言語化してくれる大人が必要になります。

未来の教科目の学びはダイヤモンドのように子どもの遊びの中にはきらめいています。保育者は気づいて、子どもの認知力を援助しましょう。



大阪総合保育大学 大方美香 教授

## 子どもの発達に即した保育について②

### 学びシリーズ②



(大東市 大東つくし保育園)



# 楽しい保育活動

## 仮装や魔女のマジックショー 「ハロウィンの集い」



「よつこぞ、ハロウィンパーティーへ。みんな楽しんでね」とんがり帽子に黒い衣装を身にまとい、軽快なBGMにのって登場した魔女がそう呼びかけると子どもたちは大喜びです。

毎年秋たけなわの10月に入ると、園内にはキノコやイモ、ドングリの掲示に加え、かわいいかぼちゃやほうきにまたがる魔女、おもしろいようなキャンディーなどハロウィン関連の掲示をするクラスが増えにぎやかになります。

これまで年長児は地域の老人ホームのハロウィンパーティーに招待してもらっていたのですが、昨年は園内で全園児が交流できる「ハロウィンの集いをしてみては」という提案がありました。保育士たちがアイデアを出しあい、各クラスが仮装して参加することに決まりました。

そして、いよいよ本番。まず「ハロウィンについて知ろう」のコーナーでは、秋の収穫で野菜や果物がた



くさんとれるようお願い、冬の始まりを控えて悪霊を追い払う外国のお祭りであることを教えてもらいます。

ついで「各クラスの仮装紹介」があり、自分たちの仮装をみんなの前で披露。ミッキーマウスやスヌーピー、ピカチュウやデビルにかぼちゃ、怖くてかわいいお面やこもりメガネなど、子どもたちが工夫して作った仮装が勢ぞろい。

最後は魔女による「マジックショー」です。魔女に連れて行かれた数名の先生たちが魔法で空中に浮いたり、魔女が「トリック オア トリート！」と呪文を唱えると、あら不思議、空っぽの紙袋の中からお菓子が出てきました。

魔女の「マジックショー」には子どもたちも拍手喝采

### 保育のあんな工夫こんな工夫

#### 模擬レストランや「トントン当番」

##### 遊び感覚たっぷり、異年齢児保育を大切に

高石保育園は21年度に民営化されたばかりの園で、遊び感覚をたっぷり取り入れているほか、異年齢児保育を大切にしています。

その一つが「おたのしみ会」。例えば年長児がウエイトレスやウエイターになる「模擬レストラン」。0歳〜5歳の子どもたちをお客として迎えます。子どもたちが来店すると、本当のお店のようになし楽しみます。

また、年長組になると毎日、外でみんなが遊びやすいようにシートを片付けたり、他のクラスの食器の後始末をします。布団に入っている友だちをトントンと

!!大きな歓声があがりました。ハロウィンパーティーを楽しんだあと、覚えたばかりの魔法のことは「トリック オア トリート」の呪文をひとりずつ唱えながらお菓子をもらい、楽しいひとときを過ごしました。  
(松原市 新堂保育園)

起こす「トントン当番」も設けています。誕生日会では、誕生日を迎えた子どもたちが得意なことを披露しますが、年長児は三輪車を出したり、長縄を回すのを手伝ったりと本当に楽しそうです。そんな姿を見ている他の子どもたちも「お手伝いしたいな」とうらやましそうです。

異年齢児と一緒に遊び過ごすことは、やさしい気持ちを育てるだけでなく、自分も大きくなったら...という期待の気持ちを育てるなど多くの学びがあります。子どもたちのそんな時間を、これからも大切にして



いきたいと思います。  
(高石市 高石保育園)

#### 編集後記

新しい年を元気に迎えられることと存じます。お正月の風景も年々変わってきていますが、凧あげ、こま廻し、かるた取りなどの伝承あそびを大切にしている保育園も多いと思います。伝承あそびは、教えたり教えられたり、身をもってコツをつかんだり、工夫を重ねたりして上手になっていきます。どれもが人々との関わりやふれあいの中であそぶものであり、とても良い経験になります。獅子舞や門松など昔からの風習も子どもたちに伝えていきたいですね。

そんな積み重ねを通して、今年も「子どもたちのほほえみ、笑い、大爆笑がいっぱいの保育園」をめざし、みんなで頑張りたいと思います。

### 待井和江先生のご逝去

#### 保育士養成に尽力



大阪の保育所保育の発展と保育士養成に尽力されました大阪社会事業短期大学(現大阪府立大学)名誉教授の待井和江先生が昨年10月8日に逝去されました。待井先生は「児童原簿」や「記録簿」の作成、「ハ

ンドブック」保育所保母のために」の発刊、保育所保育指針に基づいた独自の研修会の開催などに取り組まれ、多大なご指導をいただきました。

心から感謝を捧げ、ご冥福をお祈り申しあげます。